

村祈禱の源流について

岩田正城

(会員・佐伯市堅田柏江)

もう六年も前のことになるが、平成元年二月の史談第一五〇号に「村祈禱について」の記事を掲載して頂いた。その当時私は、祭りの源流については全く知るところがなく、現状の記述のみに終ったことは誠に残念であったがどうすることもできなかった。

ところが、はからずも白濁八幡社の緒方先生から御書翰を頂いて、村祈禱の源流及び祭事一般のことまで御教示にあずかったことは、望んでも得られないことで幾年も前のことながら今なおその御厚情に感謝している。その御教示によると、昔京都に於いて六月と十一月の二度、都の四隅の路上に八衢比古、八衢比売、久那度の三神を祀つて、邪神・悪霊が都に入るのを防いだ祭りを「道饗祭」、または「ちあえの祭」と云つたという。

其の祭りが源流となって広く全国に伝わり、「村祈禱」

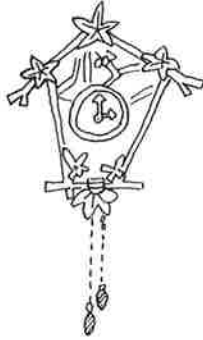
の源流となったということである。また、前述の三神については延喜式祝詞に、「玉銚の道の八衢を宇志波崎しろしめす八衢比古・八衢比売・久那度」とあるそうので、これを私のように解釈してみたがどうであろうか。

玉銚の玉は美称で、上古出征には銚を賜り、常の道行きにも銚を携えたとのことで、銚と道は不即不離となつて玉銚の道となつたのではなからうか。八衢とは幾つにも分かれた岐のこと、神代に高天原と葦原中津國との間にあつたという辻を、「あめのやちまた」と云つたという。宇志は大人、波崎は佩く。「しろしめす」は治めるで、八衢を領して防ぎ妖怪変化を退けた。「八衢比古・八衢比売・久那度」と正否は別として仮説を立ててみた。

また、久那度の神は「来莫処」の義という。この神は、伊弉諾尊が伊弉冉尊を黄泉の国に尋ねて逃げ帰る時、追いかけて来た黄泉の醜女を遮り止めた時、投げた杖から生じた神といい、邪霊の侵入を防ぎ行路の安全を守る神といわれる。また、岐の神・道路の神・道祖神・さえの神ふなどと、いろいろ名称があるが皆同じ神だそうである。

道祖神とは日本古代の境を守る塞さいの神信仰に、中国の道路の神信仰が結びついたものだそうである。その道路の神信仰については、道祖神の祖神を思わすような次の伝えがある。

共工氏の子修（一説には黄帝の子累祖）が旅行を好んで路傍に死んだのを後世道路の神として祀り、送別の祭りとしたそうである。此の神が「道祖神」のみなもとの神ではなからうか。



村祈禱とは

村祈禱とは古来より地域社会の中で広く行われていた祭祀の一つで、主として正月の初めに行われていた。

その内容は地域によって異なるが、大方は産土神を祭神として祭り、村の出入口東西南北に疫病や悪霊の進入を防ぐ守り札を立て、そのあと座元と呼んだ当番宅に集まって、加持祈禱の神事等済ませたあと、会食するという習わしであった。

こうした風習も生活環境の発展に伴って衰退の一途を辿り、近年は余り耳にすることもなくなった。

編集部 林